追憶のカンボジア——日本の読者へのメッセージ

アジア地域のすぐれた文学作品を翻訳紹介する、東京外国語大学出版会のシリーズ〈物語の島アジア〉第二弾は、カンボジア語作家チュット・カイの作品集です。その翻訳出版にあたり、フランス在住のチュット・カイ氏よりメッセージをいただきましたので、ここに掲載いたします。

（編集部）

日本の読者のみなさまへ

チュット・カイ

かねてより私は、第二次世界大戦終結後、想像をはるかに超えて短期間のうちに経済大国に変化したアジアの国、日本に敬意の念を抱いてきました。そのようなすばらしい国のみなさまに本書をお届けすることができ、こんなに嬉しいことはありません。私の作品は、これまでにも私と同じく難民として世界各国に散った同胞を含め、カンボジア人読者に向けてアメリカ、フランス、カンボジアで発表されましたが、外国語に翻訳されて紹介されるのは今回が初めてです。

今年七四歳の私は、カンボジアとフランスで過ごした時が半分ずつになろうとしています。三九歳のとき、難民としてフランスに渡ることになったのですが、母国のことを片時も忘れることはできず、時間をやりくりしては、カンボジアで起こったさまざまな出来事についてフランス語やカンボジア語で書いてきました。文化、文学、文字は偉大な力を持った剣として国や民族を守ることができると信じているからです。

私はカンボジアの社会を題材にして、少し教訓も織り交ぜながら、揶揄し批判した短編を書くのが好きです。内戦があった一九七〇年から七五年の間には、人々の不安や恐怖をやわらげるために作品をたくさん書いて、『ノコー・トム』（偉大なる都の意）という新聞に掲載していました。内戦前のカンボジアは自然が豊かで、生活するのにお金はほとんど必要ありませんでした。森林が国土の四分の三を占め、海、河、湖、沼は魚で満ち溢れ、果物や野菜がふんだんにとれる国であったことを思い出してもらい、そして将来のために記憶して欲しかったのです。

本書は事実をもとに創作した三つの作品で構成されています。フランスの植民地時代から、二〇〇万人ものカンボジア人が亡くなったクメール・ルージュの時代（一九七五—七九）のカンボジアに読者のみなさまをお連れし、その当時の社会や文化をお見せすることができるでしょう。

とくに「寺の子ども」をよりよく理解していただくには、カンボジア人のほとんどが仏教を信仰しているということを知っておいていただいた方がいいかもしれません。一九五三年にフランスから独立するまでは、お寺は社会の中心でした。そこは子どもたちが読み書きができるようになるための寄宿学校であり、貧しい人、困っている人、遠隔地から来た人のための宿泊施設でした。お寺はカンボジア社会において影響力を持っていました。僧侶はみんなにとっての先生であり、父親も子どもも同じ先生に育てられました。子どもが悪いことをすれば、父親が僧侶に叱られたり叩かれたりしました。僧侶は子どもたちが将来すばらしい人になるよう躾ける厳格な教師だったのです。

読者のみなさまが、本書を手にとって、ときに笑い、それと同時にかつて内戦が起こった一九七〇年から現在にいたるまで、いまなおさまざまな苦しみを受けているカンボジアの人々のことを心に留めてくだされば幸いです。

二〇一四年一月二七日　フランスにて

訳＝岡田知子

著者**チュット・カイ**（Chuth Khay）
一九四〇年、カンボジアのコンポン・チャム州に生まれる。首都プノンペンの名門シソワット高校卒業後、法科大学に進学。高校のフランス語教師として各地で勤務。一九七三－七四年、法科経済大学の学長を務める。反王制、共和制支持の日刊紙『ノコー・トム』紙への主力執筆者としても活動。サルトル『壁』、モリス・ウェスト『ヴェトナムの大使』などの翻訳も手がけた。ポル・ポト政権下を生き抜き、一九八〇年に難民としてフランスに渡る。その後も現在に至るまで、フランス語、カンボジア語での執筆活動を続けている。主な著作に Comment Jai Menti Aux Khmers Rouges（Editions L'Harmattan, 2004）など。

訳者**岡田知子**（おかだ　ともこ）
一九六六年、神戸市生まれ。東京外国語大学総合国際学研究院准教授。カンボジア文化、文学専攻。著書に『カンボジアを知るための62章』（共編著、明石書店）、訳書に『カンボジア　花のゆくえ』（段々社）、『現代カンボジア短編集』『地獄の１３６６日——ポル・ポト政権下での真実』（ともに財団法人大同生命国際文化基金）など。

＊岡田知子先生の翻訳によるチュット・カイ作品集は、二〇一四年四月刊行予定。